
『メガネと天狗の山』

五目御飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『メガネと天狗の山』

【Zコード】

Z4939Z

【作者名】

五目御飯

【あらすじ】

地に足が届かない女子中学生と、空氣的存在感を誇る天狗が、同棲しているらしい。彼らの日常を観察・記録をするため、筆者は立ち上がった。得た情報は適宜読者の皆様にお知らせするとともに、彼らの生態系を詳細に研究していく所存である。どうにもつまらない結末になりそうであるが、少しでも興味を持つた同人は付き合ってほしい。今 筆者の冒険が始まる。

イ（前書き）

筆者は決意したのだ。タイムマシンに乗り、天狗が現れた時代へ旅立つた。空に閃光が！「ドーン」という音に驚きを隠しきれないまま、筆者は口を開いたまま、呆然と空を眺めていた。天狗である本物だ。誰か偉人が亡くなつたのか、天変地異の前触れか、幼児が病氣なのか、おめでたなのか。筆者は天狗に駆け寄つた。倒れる天狗。危険を顧みず、それに近づく筆者。天狗からは煙があがつてゐる。「大丈夫か」「大丈夫だ、問題ない」。ブイサインを返す天狗。苛立つたので、取り敢えず蹴つておく。それから、その天狗の姿を見かけたのは、ある山中を歩いていたときであつた。これは……跟けるしかない！

ナキは非常に困っていた。

人の子が懐いてしまった。

人の子はナキに抱きつき、こう言つのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ」

ナキは非常に困った。

なぜなら、彼は天狗だから。

彼は、一刻ほど前である。

ナキは山中を散歩していた。

久々の外出であった。

冬の風が頬に当たる。冷える身体を包むように、ナキは両一の腕を持つ。

本当は、祠の奥で休んでいたかった。

しかし、そうもいかない、用事ができてしまったのだ。
人間様に呼ばれてしまつた。

山神たるもの、人がいてこそ存在できる身。
お呼ばれされたからには、行かねばならぬ。

“山神”と言つたものの、天狗という存在は、まあ不思議なものである。

神という人間もいれば、物の怪と呼び、避ける人間もいる。
善か悪かといわれると、どうにも首を傾げる存在。

生き物であるかも定かではない。
ただ、腹は減るらしい。

さて、話は戻る。
自分の名を呼ぶ人間の様子を見に、祠を出た。
どうやら、自分の名を呼んだのは童子らしい。
童子は社の前で泣いていた。
華奢な身体は、ちゃんと仕事ができるのかと尋ねたいほどである。
華奢というより、痩せ細つた、と表現した方が正しいかも知れない。

「おれを呼んだのはお前か」

上から田線の、低い声。見下した田は童子を睨み付けていよいよ
である。
別に、そういうつもりはないのだが。

「ああ、来てくださった。うれしや「ひざわこます、ナキさま」

「用件を述べよ。おれは頗る眠い」

ナキの登場に感動していた童子は、心底驚いていた。
天狗も寝るのだ。

「迷子になつてしましました」

なんということか。

迷子になつたからと、呼び出されてしまつた。

さつさと童子を人里に帰し、自分も帰宅して飯食つて寝よう。ナ
キは今後の予定を組んだ。

「お前の里はいす」元

問ひと、童子は谷を指して「あの辺りです」と言つた。
苦手な里であった。

あそこの住人は、どうも氣性が荒い。
空腹に耐えかね、里に下りると、彼らは石を投げてきた。
飢饉であったこともあるだろうが、そこまで露骨に追い出されてしまうと
しなくとも。

ナキは以降、あの里に下りることを避けていた。
まさか、このよつた形で再度訪れることがあらうとは。

「よひし。田を暝りなさい」

童子が田を暝つたことを確認。

ナキは童子を抱え、里まで飛んだ。
久々に飛ぶと、気持ちのいいものである。
引き籠り生活が長すぎたようだ。
食料は山の動物が持つてくれるため、生きるに困らない。
墮落した生活を送っていた。

ナキは童子を里の入り口で降ろした。
田を開けるよう言ひと、童子は素早く、田を全開させた。
大きな目がこちらを見つめている。
ナキはたじろぎ、田を逸らす。
視線は止まない。

「なんだ」

我慢できず、じゅらから声を掛けた。すると、童子は言ったのだ。

「うひな、ナキのお嫁さんなるわ！」

「どうじことじだりへ。

厄日なのか。今まで墮ちた生活を送っていたことに、天災がやつてきたのか。

天狗そのものが天災であるはずなのに、どうじことじだりへ。この里の人間は、どうもこの天狗を困らせてくれるらしく、敬語もどこかへ行ってしまった。

「ああ、その。反応に困るから、どうじことじは」

「天狗様がうちに来られたら、母上もお喜びになるー。」

童子と思っていた人の子は、どうやら女であったことが今更発覚した。さておき、事情が呑み込めない。

「どうじことじだ」

「天狗様が家にいると、その家は裕福になるのです。昔からの言い伝えです」

座敷童かにかと勘違いをしているのではないだろうか。だが、座敷童は家の守り神であり、裕福にする神というわけではない。

この里だけに伝わる話だろうか。

そんなことはどうでもいいのである。

ナキはそろそろ、空腹と眠気のダブルアタックに倒れそうなのだ。帰つてもよいだろうか。

「うひの家は貧乏でな、畑はよつ荒らされたる、男手はおらん、女兄弟ばつか。母上も床に伏せ……」

彼女は顔を伏せ、鼻をすすりはじめた。

泣いている。

女の泣き声は苦手である。

ナキは彼女の頭の上に、手を乗せた。

すると、瞬時に彼女の手がナキの手首を掴んだ。

油断していたこともあり、引っ込める暇もなかつた。

「どうわけで、どうかナキ様、天狗様。うちの家に来てくれん？」

嘘泣きであつたらしい。

大体の人間は、泣けば顔が赤くなるものだが、この娘の顔は先程と変わつていいない。

元気で、明るい笑顔が、じちらを見つめている。

とはいへ、言つていたことは事実らしく、やせ細つた手足は、見ていて折れそうで怖い。

なんとかしてやりたいと、ナキの良心は訴えている。

だが、こちらも非常事態なのだ。

「すまない」

ナキは、彼女の顔を見ずに、小声で言つた。

謝罪の言葉は、彼女に届いていただろうか。

確認する余裕もない。

ナキは、人の子を置いて、山へ帰つた。

また、飯食つて寝たら、来るから。

なんて、自分勝手なことを発言する」とはなかつた。「また来る

とも言えなかつた。

言えば良かつた、と後悔したのは、祠で遅めの朝食を摂つていた時であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4939z/>

『メガネと天狗の山』

2011年12月16日20時54分発行